

ナイカワング調査 一人と自然の共生

鹿児島大学法文学部
西村 知

<調査目的>

調査の目的はフィジー系住民の農村の人々が共同体に基づき自然と共存する様を把握しそのシステムを分析することである。農村をいかに近代化、開発するかという視点ではなく、彼等の持続的経済システムから長期的な観点に立った発展のあり方を考察することが究極の目的である。このアプローチは、ワッターズやベルショーの研究に見られるようないかにして前近代的なあるいは伝統的な経済関係を取り除くかという視点と対極をなす。我々の研究手法は基本的には現地調査である。今回の調査では予備調査として一週間ナイカワング村に滞在し基本的な経済構造の調査をおこなった。

<ナイカワング村の概況>

タイレブ州ナマラ郡ナイカワング村¹はスバ市の北東、車で約一時間の位置にある。村は大きなマングローブ林に隣接しており、村人は陸と海の両方から自然の恵みを享受している。村の歴史は現在のラトゥの祖父が妻と二人でより良い条件の土地を求めて移住した1918年にさかのぼる。その当時は無人の土地であった。現在この村は3つのマタンガリによって構成されている。人口は35世帯、190人が居住する。最大のマタンガリはラトゥの住むマタンガリで24の世帯で構成される6世帯で構成される2番目に大きなマタンガリの祖先はラトゥの祖父の後にコロ島から単独でこの島に移住した。彼はラトゥの祖父の使用人として使っていた。第三のマタンガリはラトゥの祖父のキョウダイを先祖とする。村人のほとんどは自給自足経済を中心に暮らしている。なかには村外での賃金労働に従事しているものもいる。第三のマタンガリの長、トゥランガ ニ コロ (turaga ni koro) は軍人である。

<調査結果>

① 移動式農業と多様な作物

村人は、各種のイモ類、ヤンゴナ、果物、野菜などを作付けている。各作物の作付面積は比較的狭隘である。そして多くの作物において間作が行われている。肥沃度を保つために同一の農地に長期的に作付けをおこなうことはせずに、作付け地は定期的に移動して

¹日本の「村」にあたるフィジー語は、行政区としてはヤブサ (yavusa) であるが、一般的にはコロ (koro) と呼ばれる。コロは、ヤブサ全体とラトゥの住居、教会、墓などのあるヤブサの中心部という二つの意味がある。

いる。興味深いことは、村人によれば、この村においては、病虫害に悩まされることが少ないということである。これは、緑の革命以降、新品種の作付け、多毛作化を推し進めた東南アジアのフィリピンの稲作農村とは対照的である。フィリピンの稲作農村では村人は常に、ネズミ、エスカルゴ、バッタなどの繁殖による被害に悩まされている。村で生産される作物のすべての種類は、村外で販売されることもあるが、基本的には村人が消費するものであり、生産物の価格に関わりなく、村人が飢えで苦しむことはない。多国籍企業の押し進める単一の換金作物の作付けは病虫害によって村の農業を不安定にし、農産物価格の低下により飢えの可能性が高まる。換金作物を食べては生きていけないからである。

② 労働の概念

前述のラブブが述べているようにフィジー人にとって労働は経済的な観点よりも社会的な観点から行われる²。人々は個人の収益を極大化するためではなく、ラトゥウやトゥラニコロ、トゥランガニマタンガリなどの社会的地位の高い人々の指導の下に家族、村の人々が豊かな暮らしの実現を目的としておこなわれる。ナイカワンガ村ではラトゥウの息子であるトゥラニコロが村の清掃などの共同作業の計画を立て指示を与える。

一人の村人の労働に同行したが、労働強度はかなり低い。しばらく労働するとフィジー式のタバコを楽しむというセッションを繰り返し、農地を行き来する村人とのジョークを楽しむ。短い調査期間ではあったが、村人の生活はベルショーが記述する³ようなストレスに満ちた社会であるようには見えなかった。少なくとも現代の日本社会に比べると彼等の笑顔は健全な社会を象徴するように思えた。

彼等は柔軟的に午前と午後に農作業をおこなうが、毎日午後 4 時ごろになると、若者たちはラグビーを楽しみ、その他の村人はヤングナ⁴を楽しむ。ヤングナは深夜まで続くことも珍しくない。

③ リーダーシップと社会変容

現在、ナイカワンガ村のラトゥウを中心とした父系社会は変容過程にある。変容の要因は複数である。第一に、経済的に裕福な村人が村での社会的地位を高めていることである。例えば前出の第三番目のマタンガリの長は軍人（軍曹）であり、彼の所得は村では数少ない西洋的な生活を可能としている。他の村民は、床にインベ（ibe）と呼ばれる裂いたパンダンの葉で編んだゴザ状のマットにの上で生活しているが、彼は西洋式のソファを用いている。また、村にはまだ電気が通っていないが、発電機を用いておりテレビなどを利用している。村では一般的には、地面に深く穴を掘り、簡易便器を設置しただけの屋外トイレを使用しているが、彼は水洗トイレも所有している。彼はレバノンへの国連軍へも同行し

² Ravuvu.

³ Belshaw

⁴ ヤングナは客人を向かえるなどの正式なものに近い親族、友人などと楽しむカジュアルなものがある。

ており欧米式の生活に慣れ親しんでいるのである。ラブブが指摘しているように⁵、フィジーの海外への軍隊への派遣は軍人を通して村の欧米化の要因となっている。彼は、ラトゥが一目置く存在である。村の重要な会合では通常、ラトゥが一番前の席に座り、それ以外の村人は少々距離を置いて座らなければいけない。しかし、彼のみがラトゥの隣に座ることができる。また、トゥラニコロよりも彼の社会的地位は高いとみられる。あるとき我々の一人がトゥラニコロを同行し彼の家を訪ねたとき、トゥラニコロのみがソファーに座ることを許されなかった。

ここで重要なのはこのような経済力を持つ人々が村の社会経済構造にどのような影響を持つかということである。我々が参加した村の集会では、最初に口火を開いたのは年配者であったが、それに続き若い男性、女性もが意見を述べ、それに対して全参加者が議論するという民主主義的な意思決定システムが構築されているかのようにみえた。村の自然を基礎とした持続的な経済構造を維持する上で重要なのはこのような議論が最終的にどのような形で落ち着くかである。現在の調査段階ではラトゥが実質的な意思決定力を持つのかそれとも実際には他の村民がより強い意思決定力をもつのかは不明である。この点を明らかにすることは我々の研究の中心課題のひとつであるといえる。

<今後の調査目標>

今後も我々はフィジーの農村調査を継続するわけであるが、その中心課題は以下のとおりである。まず第一に村の社会・経済構造を把握するために悉皆調査を含めさらに詳細な調査をおこなうことである。今回の調査における分析内容は限られた事例に基づいており村の一般的な傾向を明らかにするにはさらに多くの調査データが必要である。具体的には各世帯の収入、支出のデータ、農地の利用状況、農作業の詳細（世帯レベル、マタンガリレベル、村レベルの労働）などが明らかにされなくてはならない。また、今回はほとんど調査することができなかった村外で賃労働をおこなう者、村外に居住する村出身者の村の社会経済構造への影響も調査すべきである。第二に村の経済構造に影響を与えるスバ市やナウソリ市の市場調査をおこなうことが必要である。村人がこれらの市場で販売する作物の量、販売額などが明らかにされなくてはならない。第三に、村人は彼等の生活を計画するうえで選択可能な様々な選択枝なかからいくつかを選び組み合わせていくわけであるが、それがどのようなシステムでおこなわれているのか、そしてそれが果たして自然、人々の豊かな生活の実現と調和した持続可能なものであるかどうか分析されなければならない。

⁵ Ravuvu.